

分類語彙表および古典対照語彙表, それぞれの成立と特徴

国立国語研究所の『分類語彙表』『分類語彙表 増補改訂版』および宮島達夫さんの『古典対照語彙表』『日本古典対照分類語彙表』について, それぞれの成立の経緯と特徴とをお話します。

『分類語彙表』	主担当・林大, 国立国語研究所資料集 6, 1964年
『分類語彙表 増補改訂版』	担当・林大・中野洋・宮島達夫・山崎誠ほか多数, 国立国語研究所資料集 14, 2004年
『古典対照語彙表』	宮島達夫編, 笠間索引叢刊 4, 1971年
『日本古典対照分類語彙表』	宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉編, 笠間書院, 2014年

日本語の語彙を一覧するものには, 一語一語に解説を加えたものとして国語辞典があり, 語彙調査の結果を端的に示したものとして語彙表があり, その他にもありうるでしょうが, ある種の代表に, この分類語彙表および古典対照語彙表を挙げることはできると思います。双方の新しい版のほうの作成に, 私は関係させてもらいましたので, 少し話しやすいところがあります。以下, それぞれの初版・新版などをまとめて言うときには, いまそうしましたように, 単に, 分類語彙表, 古典対照語彙表, とします。

お話の要点をあらかじめまとめますと, 次のようになります。

- ・ 分類語彙表は, 国語研究所で, もともと, 語彙調査の結果を示す語彙表として, 五十音順のもの・使用率順のものにと並んでいた。しかし, 同義語類義語集として有用であると迎えられて初版からすでに脱皮を始め, 増補改訂版で広範な同義語類義語集となった。
 - ・ 古典対照語彙表は, 宮島さんが, もともと, 古典諸作品の類似を用語の観点から計算するために作成した。しかし, 古典諸作品における用語の有無を簡便に知る用具として迎えられ, 新版では, 語彙の計量的諸相の研究のために電子媒体が用意された。
- ともに, 作成の最初の動機を離れたところで, 世上, 活用されています。

ただ, 分類語彙表の初版・新版については, 山崎誠さんに

『分類語彙表』の特徴と問題点。

語彙資源活用シンポジウムでの発表, 2017年3月6日, 国立国語研究所。
があり, また古典対照語彙表の特に新版については, 私自身に

古典語彙の出現頻度の分布 —— 『日本古典対照分類語彙表』を利用して。

語彙研究会定例研究会第100回での発表, 2014年5月24日, 愛知学院大学。
があつて, しかるべく紹介されています。そうしたものを越えた説明はできませんので,
分類語彙表・古典対照語彙表の前書きなどを実際に読むこととします。

この勉強会は, 参加なさっているかたがたが, いま研究なさっていることについてお話をなさる場であると, 承知しています。それに対して, 今日のお話は大学の講読ないし演習のようなものになりまして, 恐縮です。

1 分類語彙表の成立と特徴

1.1 最初の分類語彙表

意味を順序立てて並べ、それに従って語彙を排列する、という表が、国立国語研究所での語彙調査の最初から構想され、「分類語彙表」の名も使われています。国立国語研究所設置法が1948昭和23年12月20日に公布・施行され、4年半後の1953年5月に報告4『婦人雑誌の用語』が刊行されました。

報告263ページ、「第5章〈章とか節とかとは言われていませんが、とりあえず第5章〉意味論上の試み」「第1節 分類語彙表」「11〈いちいち、その第1節の第1項ということになります〉まえがき」です。読みます。

「次に掲げる語彙表はこの婦人雑誌の語彙調査で使用度数が 5 およびそれ以上に上った語〈ここに注1がありますが、後で読みます。本文の次の括弧内には注がありませんが、注3が関係していて、やはり後で読みます。〉（固有名詞および数詞を除く、四千三百語足らず）について、語の意味から分類して排列したものである。

「ここでいう「意味」は、実際の紙面から読みとられる、前後の関係をふくんだ具体的なその場の「意味」ではなく、語が本来示していると考えられる、辞書に解説されるような「意味」である。〈3行ほど飛ばして〉理想的には同じ見出しが数箇所に現われてよいはずであるが、ここでは一箇所にしか現われないことになる。

「一つの語の「意味」といっても、中心的な基盤的なものと、附加的な従属的補助的なものとが区別されることがある。〈また 3行ほど飛ばして〉もし、これらの補助的な「意味」を、全く無視することができれば、すべての語彙を、一つの意味体系の中にそれぞれ配置することができるかもしれないが、ここでは、品詞論上の機能までを完全に無視することは不可能であった。〈括弧内を飛ばして3行下、〉ここに用いた第一次の品詞論的な組み分けは次のようなものである。

- I 名詞
- II 動詞
- III 形容詞、副詞及び形容動詞語幹
- IV その他（写生詞〈すなわち擬音語・擬態語〉、連体詞、
副詞2〈すなわち陳述の副詞〉、接続詞、感動詞、雑）

「これは、必ずしも従来普通の文法学説によって、一貫した品詞分類を行ったものでもなく、かといって、それに異を立てるつもりのもでもない。いまのところ、意味上の組み分けに楽なように試みたまでである。〈ここに注3がありますが、後で読みます。〉

「〈次のページへ行きます。2行目〉しかし、この企ては、なるべく便利で妥当な、分類体辞書または類義語辞典が作られる時の、また文体論上の用語の偏りをはかる時の、物さしを作る第一着手なのである。

「この試みでは、名詞の分類を中心として、できるだけ動詞・形容詞の分類をそれに近づけようとしたのであるが、やはり過不足があって、三者を総合することが結局できなかったのは前述の通りである。分類の各項には、とりたてて名前を与えず、グループごとに代表的な語を一字左に出して、それに小見出しの役目をさせることにした。それは必ずし

もそのグループの語を総轄する意味をもつものではないし、中にはもっと細かく見出しを掲げた方がよさそうな場合もあるであろう。一つのグループの中には中心的な意味において、同義と認められるものも類縁関係をもつと認められるものもふくまれている。なるべく一つの小見出しに率えられる語が、多寡のないように心がけはしたが、〈云云、以下省略します〉。」

注1・注3 を見ます。

「注1 §3 の語彙表〈五十音順語彙表・使用率順語彙表〉に収めたのは 度数9 およびそれ以上の語で、それらはこの表では「。」印を附してある。ここに度数5 を限ったのは、分類を五千語以内の程度で試みようとした〈結果は 4,300語ほどでした〉からであって、統計的な意味ではない。」

「注3 この分類のうち、「その他」の「写生詞」は、いわゆる擬声語・擬態語およびそれに準ずるものを指し、都竹通年雄氏の命名による。「副詞2」は、いわゆる陳述の副詞にあたると思われるものである。

「なお、数詞と固有名詞とを最初に除外しているが、それは表を簡潔にするためで、この分類のうちにそれをふくめるとすれば、名詞の下位分類の間でそれぞれ位置を与えることが出来るであろう。」

要点をまとめると、次のようなところでしょう。

- ・ 分類語彙表は、語彙調査の結果を意味の観点から一覧するものである。
- ・ 一語は、多義であっても 1箇所のみ配置する。
- ・ 品詞も意味を構成する。その品詞間で通用する意味分野の設定はできなかった。
- ・ 分類体辞書・類義語辞典に応用されることを狙っている。

分類語彙表の本体を見ます。

265ページ、中ほど「5. 12 〈いちに、第5章第1節2項〉 分類語彙表」、最初に「総目」があって、語数の大概も記され、合計すると 4,280です。動詞が1000語もありながら、名詞のような細分はなされず、少し気になるということにしておきます。

続いて語の一覧です。「I. 1」、総目に戻ると「抽象的關係」とありますが、ここにはその名称は記されず、実際の語として「これ。〈句点。まえがき注1 にありましたように、使用度数が 9以上であることを示しています〉これら。それ。あれ。どれ。どちら。」〈何もかも〉の「か(も)」が挙げられます。この「か(も)」は、使用度数が小さかったので句点がありません。その直後、行末に〈鉤括弧閉じる〉があるべきかと疑われます。改行して「存在」頻度が低く、「事。」頻度が高い、「対象」低頻度、以下、高頻度の「何。何事。事件。」が並び、「出来事、何物」ともに低頻度、〈鉤括弧閉じる〉がこの行末にもあってよいかと思えます。また改行して、「項〈空白〉、別項。前項。由」、今度は行末に〈鉤括弧閉じる〉があります。3行ほど飛ばして、「方法。」から始まるものは、字下げで5行でまとまる、大きい一群になります。以下、この265ページから274ページまで、語彙表が続きますが、読むのは省略します。

語の大きさ・長さといったものについて、言わなければならないことがあります。次の語彙調査のところに吸収させます。

1.2 『総合雑誌の用語』

国立国語研究所では語彙調査が続けられ、1957年3月に報告12『総合雑誌の用語 前編』、翌1958年2月に報告13『後編』が刊行されました。『前編』に五十音順語彙表と使用率順語彙表とを掲げ、『後編』に分類語彙表を掲げています。

分類語彙表の本体のほうを、今度は先に見ます。『後編』51ページ、標題「分類語彙表」、左下の「1. 1」から始まります。この数字は婦人雑誌の際と同じですが、次には婦人雑誌になかった「100〈いちぜろぜろ〉」という数字があります。数字は、最初の「1. 1」の小数部分を入れ換えて「1. 100」と読み、以下に並ぶ一群の語の番号になります。その語というのは、「*〈アステリスク付きで〉これ。〈句点。アステリスクは高頻度であることを示し、句点は後で説明を見ます。〉この」、〈空白〉があつて、今度は*無しで「本〈ほん〉、当〈とう〉」、二重鉤括弧閉じで、この二重鉤括弧閉じまでが中頻度、その後は一重鉤括弧を閉じるまで低頻度以下で「這般」です。改行してアステリスク付き高頻度の「それ、その」、さらに改行して高頻度「あれ、あの」、中頻度「かの」、二重鉤括弧閉じで、引き続き「こんな、そんな等」矢印で「3. 10」とあります。この「こんな、そんな等」は、この項目のものではなく、関連していて語群「3. 10」を参照せよということです。次の行も、「どれ、どの」とある後に、「ここ、そこ等」→「1. 17」とあります。整数部が省かれた番号は、いまある箇所の整数部「1」を添えて、「1. 17」です。

6行下、行の初めに「1」という数字があります。このばあいは、直前の数字「100」の末尾を入れ換えて「1. 101〈いちてん、いちぜろいち〉」の数字になり、続く語群の番号になります。さらに下には、「2」すなわち「1. 102」などの数字があり、また「110」すなわち「1. 110」などの数字があります。

語彙表の見た目で、婦人雑誌のものとの違いとして、この番号があること、またアステリスク、二重鉤括弧閉じがあることが、大きいところかと思えます。ただちには気づかないこともあり、報告の45ページに戻って、語彙表のまえがきを読んでみます。

分類語彙表を作成する意義が最初に述べられています。読み飛ばして、45ページのいちばん下に行きます。「この分類語彙表は、報告書前編の五十音順語彙表に掲げた各語を、意味の分類の各項目に配分したものである。その「意味の分類」は、国立国語研究所報告4『婦人雑誌の用語』（1953）の§5. 1 分類語彙表に試みたものを修正したものである。大きな違いは、彼の写生詞と連体詞と副詞の或るものとを、形容詞の群へ入れたこと、比較的大きな分類項目に彼の場合よりも細かい番号を与えたこと（〈括弧内も読みます〉前編の五十音順語彙表の「分類目」の数字はこの番号で、従って五十音順語彙表はこの分類語彙表の索引の役目をする）、名詞の群、動詞の群、形容詞の群等のそれぞれの内部では〈「それぞれの内部では」よりは「間では」のほうが分かりやすく感じます〉、互に連関するものを明らかにするために、それぞれほぼ同様の分類に整理し、番号をなるべく共通にしたこと（これは群の区別を撤廃することができないわけでないことを示す）、などである。」

番号は、いま、表本体で見ました。ここに（ ）内に言われている五十音順語彙表のほうを見てみます。報告12『前編』11ページが「五十音順語彙表」の始まりであり、表の横

軸の一番右、最も右の列に「分類目」があります。意味分類の番号の整数部1桁と小数部2ないし3桁が記されています。表のいちばん上の行は、指示詞「あの」のβ単位見出し「ア」で、右端の列に分類の番号の「1. 10」が記されています。この小数2桁では範囲が広過ぎますが、実際に分類語彙表に当たってみると、「1. 100」の3行目に「あの」があります。分類語彙表における位置をこのように示すことができるのは、語群の番号を設定したことによってでしょう。例えば、分類語彙表の何ページの何行目、という示しかたをすることもできますが、番号で示すのに比べて抵抗感が大きいように思います。

また、分類語彙表の中で参照するのにも番号は便利で、その例を「1. 100」で矢印とともに見ました。ただ、実際には、「1. 17」というのは見当たらず、小数第3・4位に「00」を添えた「3. 1700」が54ページにあって、その番号の3行目に「ここ、そこ、あそこ、どこ」などと並んでいます。70ページに「3. 1」があり、すぐに「10」すなわち「3. 10」で、「こんな、斯（か）よう、斯（こ）う、斯（か）く、斯（か）か）る、これしき」、鉤弧があって改行して、「そんな、そう、しかる」などと続きます。

分類語彙表のまえがきを離れて恐縮ですが、分類の項目・番号については、分類語彙表の末尾に一覧表が添えられています。そこには、分類の細かいところにも名前が付けられています。報告74ページ、「分類項目一覧」という標題があります。最初のところ、「1. 名詞, 1. 1 抽象的關係, 1. 100 コソアド」「1（すなわち 1. 101）物事・項」ですが、表本体ではこれが「101」と「102」とに分かれ、ここで番号にずれが生じて、表本体の「3」に対して「2 現象・真」、表本体の「4」に対して「3 自体・別物」、さらに「1. 110 種類」のように続きます。番号の整合性など、宿題は残りますが、志は知ることができます。

番号について、先に読んだまえがきを、もう一度見ます。番号を細かくしたのみならず、名詞・動詞・形容詞を通して、番号の小数部分が同じになるようにしたと、記されています。報告4『婦人雑誌の用語』で、品詞も意味を構成することを発見したものの、その品詞間で通用する意味分野の設定はとりあえずできないとしていましたが、この『総合雑誌の用語』でできたこととなります。まえがきの少し先、47ページには、番号の小数第1位について、次のようにあり、実は、『婦人雑誌の用語』で名詞に適用されていた分類が、他の品詞にも拡大された、ということになります。

- . 1 抽象的關係
- . 2 人間活動の主体 〈動詞・形容詞にはこの類はありません。〉
- . 3 人間活動 ——精神および行為
- . 4 生産物 ——結果および用具 〈動詞・形容詞にはこの類はありません。〉
- . 5 自然 ——自然物および自然現象

ただし、すぐに続けて「各部門の内容が、さらにどのように分類されているかは、実際に分類表に当たって見られることを望むが、それを原理的に述べることは至極困難である。その排列（番号づけ）は、各項は必ずしも一列には相接続してはいないから、土地に番号をつけるよりもはるかにむずかしいと思われる。しかも個々の語の持つ意味上の領域は、互に他を犯さないようなものでなく、広がりにおいて大小様々であるから、白地図の平面の上に書き入れていくには無理がある。」のように断わっています。

分類の項目・番号についてはひとまず終えて、まえがきを46ページの続きから読みます。

「なお、大切なことは、婦人雑誌の分類語彙表の場合には α 単位の語を収め、このたびの分類語彙表には、この報告書 §2・3 に説明するような β 単位の語を収めたことである。従って、この総合雑誌の場合には、婦人雑誌の場合と同様《気をつける、筆をとる、ピンからキリまで》のようないわゆる慣用句が、表の中に現われないことのほかに、婦人雑誌の表にはある《お化粧法、看護婦、民主主義》のような合成語も、ここでは《お、化粧、法、看護、婦、民主、主義》のように分解されて、含成された全体の形としては現われない。これは、今のところ、純粹に意味上の単位を設けることが困難で、ことばの形式的な面を手がかりとする統計のための単位分割に従ったからであって、類義語集としては不十分であることを免れない。（重要な概念がこの表に見当たらないとすれば、それはこの調査の範囲では、その概念が重要なものとして現われなかったか、または β 複合として表わされていたか、のどちらかである。〈以下、省略します。〉）」

α 単位というのは、非常に大雑把に言えば、文章中で自立語を構成している要素で、単独のもの、また、幾つかが結合しているときにはその間の関係を見て、対等・主述・修飾などであれば分割したものです。 β 単位というのは、その α 単位を構成していて、単独のもの、また、幾つかが結合しているときには分割され、4音節以上でさらには分割されないもの、3音節以下同士の二つが結合したものの、残りの部分、といったところです。例は上に挙げられていますが、詳細にはいま立ち入らないまま、失礼します。

要するに、『婦人雑誌』から『総合雑誌』になって、扱われる語が、構成要素2個以下に分割された短いものになりました。意味の側から言えば、挙げられた語は、意味の具象性・複雑さが小さくなり、抽象性が大きくなったかもしれない、ということになります。

以下、意味についての議論がありますが、いま飛ばして、48ページ最下部に行きます。

「以下の表は、本来、この総合雑誌の語彙調査の前半に得られた延べ十二万語に対する、異なり一万六千語について作ったものであるが、今ここに掲げるに際しては、報告書の前編の五十音順語彙表に収めた四千二百語を特に採り上げて示すこととし、それ以外に調査の前半後半を通じていずれかに現われた語のおもなものを選んで、付載することとした。それによって、分類のわくが明了さを加え、かつ、総合雑誌における多度数語の性質が見やすくなるであろうと思われたからである。

「表の体裁について述べると、

行頭の数字は前編の五十音順語彙表の分類目に示した番号の、小数点以下2桁と、同一番号のうちを更に細分して番号を与えた場合の、第3, 4桁である。細分の場合、第1, 2桁は多くを省記した。

同番号の項の中も、小グループごとに、行をかえて一括した。

」〈鉤括弧閉じる〉はその小グループの限りを示す。

』〈二重鉤括弧閉じる〉の前に掲げるものは、標本使用度数7（使用率0.030‰）以上の語（五十音順語彙表に載せた語）。—— は、そのグループに該当の語がないことを示す。

そのうち、頭に * の印を加えたものは、標本度数30（使用率0.130‰）以上の語。〈さきほど表本体を見たときに、これを高頻度と言い、*がなくて』の前のも

のを中頻度と言いました。)

』の後に掲げるものは、標本度数6以下の語 (の一部)。〈さきほどは低頻度と言いました。)

以上のうち、尾に 。 の印を添えたものは、『日本語基本語彙』(国際文化振興会、1944年)の二千語に含まれた語。

(の後に掲げるものは、この調査では得られなかったが、『日本語基本語彙』にある語。

報告の本体は、『』の前に並ぶ語であり、高頻度のものを示すとともに、意味の世界の全体におけるその地位を知るために、低頻度の語も掲げ、あるいは別の語彙一覧との間の有無の関係も明示する、といった措置に、分類語彙表を作成する志を見る思いがします。ここにやや唐突に現れる『日本語基本語彙』については、この前、読み飛ばした46ページから47ページにわたるところに、次のようにあります。調査以前からの志が知られます。

「婦人雑誌の語彙分類をはじめの際には、まだ分類のわく組が出来ておらず、かつ類義語目録の先例として爾雅、節用集等の古い分類辞書の類か、土居光知博士の基礎日本語、ROGET の Thesaurus ぐらいしか知らなかったので、四千三百語の中で類義語を集めながらわくを組み立てていった。(もっともその前に、『日本語基本語彙』(国際文化振興会)の二千語について同様のことを試みてはいたが、このわく組は、また別にたとえれば、いわば精粗のつりあいが悪くにしても、海岸線と行政区画の線だけを表わした白地図のようなもので、このたびの総合雑誌の語彙の場合には、この白地図の上に、区画を修正しながら、前半の調査で得られた一万六千語を書きこんでいったことになる。そこでは、思考や行為に関するもののように、婦人雑誌の四千語の場合よりずっと細かく区画をしなければならなくなったものもあり、また衣食住に関するもののように、一区画の中の語の密度がずっと小さくなったというようなものもある。」

婦人雑誌の分類語彙表から総合雑誌の分類語彙表へ、次のように変わりました。

- ・ 語が、 α 単位でなく、 β 単位になった。長い複合語が現れなくなった。
- ・ 分類項目を細かくして名称・番号を付け、品詞間の関連が分かるようにもした。五十音順語彙表にもその番号を記載した。
- ・ 意味の世界の全体における高頻度語が分かるように、関連語彙も掲載した。

変わらなかったのは、分類の大枠は変えず、調査の結果を呈示し、ただ多義でも一項目にのみ掲載した、ということなのです。

1.3 初版『分類語彙表』

国立国語研究所では語彙調査が進められて、1962年3月に報告21『現代雑誌九十種の用語用字 第一分冊 総記および語彙表』が刊行され、五十音順語彙表・使用率順語彙表が掲載されました。1963年3月に報告22『第二分冊 漢字表』、1964年3月に報告23『第三分冊 分析』も刊行されつつ、この報告のシリーズでは分類語彙表は出ませんでした。

報告『第一分冊』五十音順語彙表には、分類番号が記されています。総合雑誌のばあいと違って、分類番号の整数部・小数部の全部を挙げ、最も左の列、語の頭に配置されます。その最初、36～37ページを眺めます。第1行、「分類番号 3.100 〈小数点は省略されていますが、読んでおきます〉、見出し アの 指示詞 〈とあって、総合雑誌では代名詞でしたが、ここでは相の類に入っています。「あの」の形で現れますので、連体詞相当と見られたのでしょうか。〉」、その次の行は、「分類番号 4.310 ア、アア 〈二つの語形を異形態と見なして一つの見出しにまとめたということです。〉 感動詞」です。さらに次の行は、「〈最初の行と同じく〉分類番号 3.100 アア 指示詞 〈これは副詞でしょう〉」のように続きます。次の「3.112 相〈あい〉」は接頭辞、以下、読むのは省略します。

この表のまえがきの末尾、35ページに、分類語彙表の刊行が予告されています。「語の意味によって分類した表を、別の分冊に掲げるが、〈云云、省略〉。(この意味分類表は報告13〈『総合雑誌 前編』〉の§4に掲げた表に相当するが、分類番号の与え方は一部改めた。)」実際に分類語彙表は用意されていたと信じられ、報告『第三分冊』と同時の1964年3月に初版『分類語彙表』が刊行されます。ただ、現代雑誌九十種の用語用字の報告のシリーズに組み込まれず、資料集の一冊となりました。初版『分類語彙表』が現代雑誌九十種の用語の調査の結果を踏まえているにもかかわらず、この変更の事情は分類語彙表などにも語られず、不審です。収録語彙の範囲が、調査の結果を呈示するところから大きく拡大したことは、一因でしょう。意味分野の設定の試み、同義語類義語辞典の基礎としての意義が、研究所内で積極的に評価されたのであろうと推測します。

まえがき 7ページに次のようにあります。「この分類語彙表に収めた語は、およそ三万二千六百語である。これらの語は、国立国語研究所報告21『現代雑誌九十種の用語用字』第一分冊(1962)の語彙表に掲げる高使用率の語のうち、人名、会社名、球団名等の個別の名、および記号の類を除く約七千語を中心とし、それにつづく使用率をもつ約五千語を補い、さらに阪本一郎氏の『教育基本語彙』に選ばれた二万二千五百語のうち、上と重複しないものを加え、また、それらの語を各項目に分類したものを通覧した上で主観的に増補したものを含むものである。」つまり、高頻度語の数は7千、中頻度語の5千を加えても、調査に関係するものは合計1万2千です。表全体3万2千6百語の21%ないし37%です。調査結果を示したと言うには、周囲を拡大し過ぎていたと見えます。調査結果の分量が少なくなったためか、総合雑誌の際に示された、高頻度・中頻度・低頻度以下のような区分は、簡略化されました。高頻度の*印のみが残り、鉤括弧などは使用されません。

初版『分類語彙表』のまえがきから、いくつか拾い読みします。

分類語彙表の役割について、1ページ最下部から2ページにかけて、「これがわれわれの主要な関心点であるが、基本語彙設定のための基礎データとしての役割である。〈少し省

略して) 一国語の基本語彙は、生活上のまたは意味上の各分野から、最も適切な単語を選ぶことによって定められなければならない。そのためには、表現されるべき世界、意味の全分野が、偏りなく余すところなく見渡されなければならない。そこに分類一覧表があって、その各項に収める語句の重みが、その必要性や、はたらきや、語感など、また実際の使用率や使用範囲などの観点から、互いに比較商量されることになる。すなわち、類義語間のつりあいを、広い見渡しの上で、狭くも広くも見ることができ、したがって適切な語の選択ができるということになるであろう。」とあります。主要な関心点というのは、それまでの語彙調査、あるいは他の調査でも同様ですが、国立国語研究所の存在意義にかかわることです。

国立国語研究所設置法は、第1条〈目的及び設置〉第1項に「国語及び国民の言語生活に関する科学的調査研究を行い、あわせて国語の合理化の確実な基礎を築くために、国立国語研究所を設置する。」としています。第2条〈事業〉第1項に「研究所は、次の調査研究を行う。」として4点を挙げ、「1 現代の言語生活及び言語文化に関する調査研究、(中略) 4 新聞における言語、放送における言語等、同時に多人数が対象となる言語に関する調査研究」とし、第2項に「研究所は、前項の調査研究に基き、次の事業を行う。」として3点を挙げ、「1 国語政策の立案上参考となる資料の作成、2 国語研究資料の集成、保存及びその公表、3 現代語辞典、方言辞典、歴史的国語辞典その他研究成果の編集及び刊行」としています。これらの条文のどこに対応するか、厳格にいうことはできませんが、要するに、法律が求めるところによって研究所の事業は運営されていて、分類語彙表の底流にその法律があることとなります。他にもある意味分類の語彙表や辞典と比べて、初版『分類語彙表』の際立った特色となるべきところです。

『分類語彙表』の性質について、6ページ、「従前の研究所報告(4〈婦人雑誌〉、13〈総合雑誌〉)における分類語彙表では、一つの語形は一つの項目にしか掲げなかった。すなわち、一つの語については一つの意味しか取りあげなかったのであるが、このたびの分類語彙表では、ある程度、多義を考慮して、一つの語でもいくつもの項目に掲げたものがある。先にあげた〈やく〉〈譬喩では原義のみを取り上げるが、人間活動の「妬く」と自然現象の「焼く」とは別に掲げると、5ページで言っています。〉もその例といってよい。また今の複合語、たとえば〈言い直す〉を(2. 312)の《言語》の項と(2. 1501)の《改新》の項とに両掲したようなものもある。もとよりこれらも十分精到なものではない。

「複合語のうち、〈真善美〉や〈和敬清寂〉のように、ちがった範疇に属する語がそれぞれ独立しつつ複合しているものでは、それぞれの語をそれぞれの項目に分出しないうけにできなかった。〈公序良俗〉のような結合も、もとより〈公序〉と〈良俗〉とにわけて考えることにした。」のようにあります。同義語類義語辞典・表現辞典のためには、多義語を多項目に掲げ出すことが強く求められると理解できます。ただし、まだ緒に就いたところであるようです。

先に、収録した語数のことを引用しましたが、それに続けて、次の収録方針も述べられています。「日常生活でより基本的な役割をはたしている語は、大体において取りあげてあるかと思うが、主観的増補に際して、この表を見ればすぐにその項目に属すべきものとして思い浮べることができると思われる語、所属項目の明白な語は、よほど重要と認めな

い限り、割愛したものがある。たとえば〈ひちりき〉をあげないが、それが《楽器》の類(1.456)であることは明らかであろう。

「また、いくつかの語が組になっているような場合に、一つか二つだけをあげて他を加えなかったものがある。たとえば〈真北、真西〉はあげたが、〈真南、真東〉をしいて加えなかった。また、比較的専門特殊に属すると認める語も多くを捨てた。すでに中心の七千語の中に、たとえば裁縫用語（この表の 1.384 や 1.42 など）や、野球や将棋の略語（この表の 1.337 や 1.457 など）もあるのであるが、これらとの比較の上で、基本的な語の採択を決定させるのが、この表の役割そのものと考えられるわけである。」ある分類項目について掲載語数が多い・少ないといった議論をすることは、この『分類語彙表』については、意義がないことになります。ある作品、あるいは幾つもの作品の出現用語の全体を見て、ようやく分類項目ごとの語句の多少が議論できる、ということになります。

『分類語彙表』の体裁について、8ページに高頻度語の説明があります。「星印の語は、報告21の語彙表に掲げるもの、すなわち、現代雑誌九十種の語彙調査において、使用率が0.014パーミル以上（標本使用度数が7以上）であった語である。ただし、この語彙調査はβ単位を数えたものであり、したがって星印の語は、もとよりβ単位である。しかし、この分類語彙表には、β単位以外の語（語彙調査で〈適用されていれば〉2単位以上に分割した語）をも収めているので、この表の中で、星印の語とその他の語とを、使用率の上から比較することはできない。

「なお、2項目以上に星印で重出するものがあるが、それぞれの項の意味で基準以上の使用率があったものとは限らない。報告21の語彙表では、一般に多義の用法を合わせた使用率が示してあり、今はそれを意味ごとに分割せず、重出する限り星印で示した。〈もの〉は報告21では〈者〉と〈物〉とを合併しているが、この分類語彙表では、〈者〉と〈物〉とを別に出して、ともに星印にしてある。」こうした重出によっても、語彙調査の結果を示すところからは離れているように思います。

初版『分類語彙表』の特徴を一言でまとめるならば、語彙調査の結果を示す表から同義語類義語集への脱皮を始めたということになるでしょう。

初版『分類語彙表』は、言語の研究で盛んに利用されました。その様相は、次に一覧されています。

宮島 達夫・小沼 悦 (1992) 言語研究におけるシソーラスの利用。

国立国語研究所報告 104 研究報告集 13 pp.1-30

<http://doi.org/10.15084/00001124>

増補改訂版の刊行までまだ12年間ありますから、利用はさらに多くなっているはずですが、利用の一例を挙げよと私が言われたならば、利用の一覧にも挙がっている一つ、

『日本語教育のための基本語彙調査』国立国語研究所報告78, 1984年を挙げます。日本語を教育・学習する際の基本語彙を選定しようとする研究で、『分類語彙表』は、その選定の資料ともし、結果の呈示の手段ともしています。

1.4 『分類語彙表 増補改訂版』

『分類語彙表 増補改訂版』のまえがきを、かなり飛ばしてですが、読みます。基本的には、「本書は、『分類語彙表』の増補改訂版である。」として、まえがきも、初版と対比するところが多くあります。コメントはすでに不要であると思います。

収録した語句について、3ページ、「本書に収めた語句は、文法上の自立する「単語」を基本にするが、それと同様の意味上の働きを持つ連語・接辞・慣用句等を排除しない。すべてを「語」と呼んでおくことにする。

「語の採用範囲であるが、現代の日常社会で普通に用いられる語を中心に、各種語彙調査の結果その他から選定した。異なり語数は約8万語である。一つの語が複数の分類項目に分類されることがあるので、収録した総語数としては約9万6千語となる。なお、耳慣れない専門用語や古語・方言、また社会生活上使用を遠慮すべき語の類は除いている。」

増補の内容について、5ページ、「増補のうち、注意しておきたいのは、1) サ変動詞 2) 慣用句 3) 多義語 の3点である。

「1) サ変動詞のうち、1字漢語に「する」がついた「愛する」「信ずる」の類は、元版にもはいていた。しかし、2字以上の漢語をもとにした「愛好する」「信用する」「合理化する」などは、採用していなかった。基準にした現代雑誌九十種の調査の単位が、阪本一郎『教育基本語彙』や一般の国語辞典とおなじく、「愛好」「する」などに切れていたためである。意味の説明を目的とする辞典ならば、「愛好」という項目があれば、別に「愛好する」という項目をたてる必要はないだろう。しかし、類義の表現をさがす、という分類語彙表の目的からすれば、「愛する 好むたしなむ 好く めでる 好き好む」があれば、「愛好する 愛慕する 愛着する」も同じところにあった方がよく、〈中略〉今回はこれらを増補した。

6ページ、「2) 辞典の見出し語と違う単位を増補した、という点では、慣用句もサ変動詞と同じである。例をひくと、元版の「愛する」に加えてサ変動詞の「愛好する」とともに、類義の「気に入る」を増補した。〈下略〉

「3) 基本語の多くは多義的である。その意味のそれぞれには、当然別の分類番号が与えられなければならない。〈中略〉元版における多義語の処理は、不十分だった。今回の増補改訂版ではこの点を改良して、同じ単語を意味に応じて何箇所にも出すようにした。」

分類項目の修正について、7ページ、「分類それ自体の変更ではないが、使いやすさのために、次の2つの修正をほどこした。」

「第1 は、「中項目」の設置である。元版では、〈1.1 抽象的關係〉という部門の下位分類が〈1.1500 作用〉という分類項目だ、ったのだが、今回、中項目を立てて、たとえば分類項目の〈1.1500 作用・変化〉から〈1.1584 限定・優劣〉までを〈1.15 作用〉という形でくくった。」順番が前後しますが、4ページ、分類について、「今回の増補にあたって、試みとして中項目を設けた。これは、小数点以下一けた目と二けた目を合わせた部分に相当する。中項目は部門〈小数1桁目〉をより具体的に細分したもので、その下位に

位置する分類項目をまとめるものである。」としています。

元に戻って 8ページ, 「第2 は, 段落番号の設置である。元版でも, 同じ分類項目に属する単語はいくつかのグループ(段落)に細分され, それぞれ先頭が1字下げになっていたのだが, 特にそれぞれに番号が付けられてはいなかった。しかし, 1994年に国立国語研究所言語処理データ集5 として『フロッピー版分類語彙表』を出すにあたり, 語の検索を容易にするために, これらの段落に番号を付けることにした。今回は, 語数がふえたこともあって, 段落番号の必要性は一層まじると言える。しかし, これはあくまで検索の便宜のためであって, 分類自体の小分けを意味するものではない。」

続いて, 体裁の変更として, 「元版では, 動詞は連用形を代表の形として見出しを立てていたが, 増補改訂版では終止形に変更した。また, 元版では, 各項目の分類番号が小数点以下3けたのものと4けたのものがあったが, 増補改訂版ではすべて4けたに統一した。」とあります。

分類語彙表の展開について, 例えばいま出てきた『フロッピー版』には触れませんでした。また, 『増補改訂版』にも, 言語処理などに活用するために, 種類の修整が試みられています。それについても, 触れないこととします。

インターネット上のありか

国立国語研究所報告 4 (1953年5月30日) 現代語の語彙調査 婦人雑誌の用語。

<http://doi.org/10.15084/00001213> pp. 263ff. 「5 意味論上の試み」

国立国語研究所報告 12 (1957年3月) 現代語の語彙調査 総合雑誌の用語 前編。

<http://doi.org/10.15084/00001225>

国立国語研究所報告 13 (1958年2月) 現代語の語彙調査 総合雑誌の用語 後編。

<http://doi.org/10.15084/00001226> pp. 45ff. 「4 意味から見た語彙の構造」

国立国語研究所報告 21 (1962年9月15日)

現代雑誌九十種の用語用字 (第一分冊) 総記および語彙表。

<http://doi.org/10.15084/00001233>

国立国語研究所資料集 6 (1964年3月31日) 分類語彙表。

<http://doi.org/10.15084/00002267>

国立国語研究所資料集 14 (2004年1月30日) 分類語彙表 増補改訂版。

<http://doi.org/10.15084/00002283>

<https://ccd.ninjal.ac.jp/goihyo.html> データベース

このページで, 『分類語彙表 増補改定版』の展開を知ることができる。

2 古典対照語彙表の成立と特徴

2.1 『古典対照語い表』

『古典対照語い表』という標題をもつ冊子が、笠間索引叢刊4のものに先立ってありました。表紙に「古典対照語い表 1969・12 宮島達夫」とあり、発行年月・著者を知ることができます。著者は出版者でもあるでしょう。本体は、B4判紙縦置き方向で、片面に単一黒色印刷、まえがき14葉、本表129葉、全文横書きで手書き、簡易綴じにしています。これが古典対照語彙表の最初の姿です。

まえがきは、次のように始まります。

「この語い表は、古典における用語の類似度を調査するための基礎資料としてつくったものである。

「表は各ページとも3つのらんに分かれている。左のらんにあげたのは、2つ以上の作品に共通してあらわれた単語、中央と右の2らんにあげたのは、1つの作品だけにあらわれた単語である。

「度数は、調査単位のとり方など、かぞえ方によってかわる。たとえば、源氏物語のことなり語数および「心」「たまふ」の度数は、索引のままのと、ここでとった基準によって修正したばあいとで、つぎのように大きくかわってくる。

	ことなり語数	「心」	「たまふ」
修正前	14206	1489	13882
修正後	11423	3411	81

これは、「心」については「心なし」などの「心」をあわせたため、「たまふ」については補助動詞としての用法をすてたためである。したがって、この表にあげる数字は、すべて、以下にのべるような基準でかぞえるところなる、ということであり、もし他の作品と比較しようとするなら、その作品の用語もここにあげた基準によってかぞえなければ不正確である。」

これで第1ページの上 1/3 を費やし、続いて 5ページの末尾まで、凡例として作品や基準などを述べます。さらに統計表で、最後の 14ページのものが「用語の類似度」です。

このときの作品数は 12 でした。万葉集、竹取物語、伊勢物語、古今和歌集、土左日記、後撰和歌集、枕草子、源氏物語、紫式部日記、更級日記、方丈記、徒然草 です。

宮島さんのこの研究は、国語研究所の中で進められ、科学研究費も交付されていますが、研究所の研究課題ではありませんでした。扱う作品が古典であること、また他の研究員が参加しないことが、研究所の研究とならなかった理由です。しかし、成果は、研究所所長の岩淵悦太郎さんに認められ、出版先を紹介されることにもなりました。自家版刊行から僅か 2年足らず後の出版でした。

『笠間索引叢刊4 古典対照語い表』は、表本体の基本的な構成は横書き 3欄で変わりませんが、やはり手書きで新しく描き直されています。作品に蜻蛉日記・大鏡の 2点が加わり、紙面を横書きで使って、328葉になっています。

大きく変わったのは、表の存在意義です。すなわち、まえがきの第一条が次のように置

き換わります。

「本書は、古典のなかでどの単語が〈どの作品で〉何回ずつ使われているかを、表にしてしめたものである。」として、用語の類似度ということは消え、以下、凡例にも類似度は現れません。統計表が巻末に回ってその最後、つまり一書の最後に、ようやく類似度の表が示されるのみになります。

自家版のまえがきの最後のあたりの一文も、次のように改められました。「したがって、この表を〈索引の索引〉として利用するにしても、ほかの作品の用語と比較するにしても、「凡例」にのべた単位認定その他の方針に注意していただきたい。」自家版が出るや否や、そもその作成の意図から離れて、表の効用が知られたということです。

『古典対照語い表』を利用したという論文は、時たまに見かけます。ここでは、全面的に使用したものとして、私は次を挙げます。

大野晋・編『古典基礎語辞典』角川学芸出版、2011年
大野さん没〈2008年〉後の出版で、執筆陣の序文があり、次のようにある。

「平成10年ころから〈大野〉先生が病気がちになられたこともあり、辞書の完成のために、先生は計画の変更を決断された。すなわち、収録項目数を大幅に減らし、基礎語の辞書を作成するという方向転換である。項目数は大幅減となるが、個々の項目については必要なだけの分量を確保することは変わらない。具体的な基礎語としては、『古典対照語い表』（笠間書院刊）において41例以上の用例のある1353語を中核とし、隣接する語や同一範疇の語とのバランスなどを考慮して語を増やしていった。当時の文化的・社会的な背景を知る上で重要な語、というのも、項目を選定する観点の一つになった。採否の決定は先生が行い、最終的には約3200語を採録することとなった。」

なお、この「〈全作品の合計で〉41例以上の用例のある1353語」は、『古典対照語い表』を見ただけでは分かりません。この算定は、次のデータから行ったかと思われます。

宮島達夫・中野洋・鈴木泰・石井久雄

『フロッピー版 古典対照語い表 および使用法』笠間書院、1989年
『古典対照語い表』には、このような版もありました。

2.2 『日本古典対照分類語彙表』

『日本古典対照分類語彙表』は、宮島さんに鈴木泰さん・石井・安部清哉さんが協力して、2014年に、笠間書院から、ただし索引叢刊のシリーズなどに組み込まれない言わば単刊として、出版されました。内容は、まえがきに当たるところに、簡明に記されています。

「本書は、宮島達夫編『古典対照語い表』（1971年 笠間書院刊）の改訂増補版にあたる。古典でどの単語が何回使われているかを、作品間で対照できる表にまとめている。

「旧版は〈中略〉14作品を対象としていたが、今回、平家物語・宇治拾遺物語・新古今和歌集の3作品を追加して17作品とし、平安作品と徒然草とのあいだの空白を多少うめることができた。

「今回は、また、すべての単語に国立国語研究所編『分類語彙表』（増補改訂版 2004年 大日本図書）の分類番号〈および項目名称〉を記した。これについては各索引を参照

し、あらためて語意を確認した。」

加えるならば、表の体裁が変わりました。旧版では、2以上の作品に現れる語と、1作品のみに現れる語とを分けて、前者を左欄に配し、後者を中欄・右欄に配していました。新版では、現れる作品の数による操作はせず、1欄のみとなりました。しかも、B5判の見開きに1行を展開させています。

また、集計は別冊に記しました。表に新たに加わった意味分類について、利用の例も記しています。さらに、次に述べるデータをエクセルで活用することについて、小木曾智信さんが解説してくれています。

いま一つ加えるならば、CDが付いています。その内容について、凡例の末尾に次のように説明があります。

「印刷されたすべてを、コンピュータ・ファイルでも提供する。

「表はMS エクセル・ファイルである。xlsx と xls とがあるが、同じ内容である。

「なお、正しくは、このファイルを印刷したのが本書である。漢字の字形は、コンピュータのシステムやソフトウェアあるいはプリンタなどによって小異が出る。本書の字形は一例である。〈下略〉」

「「展開」というフォルダを設けて、簡単な集計などをしたファイルを提供する。

「出現頻度配列語彙表・意味分類配列語彙表も、そこで得られる。〈下略〉」

語彙調査の結果を示す語彙表には、五十音順・出現頻度順・意味分類順の3点を揃える目標がありました。古典対照語彙表でも、その期待がかなえられたこととなります。

ただし、意味分類順語彙表では、多義語のばあい、分類番号が最も若い一つのみを取り上げ、他の分類番号では出てこない、という設定にしています。代表的な意味の分類番号で配列するという事は、考えられるところですが、どのように代表を決めるか、その方法が見つかりません。多義の一つ一つの意味で語を重出させるということは、さして手間がかかるのではなく、別に実行してみました。ただし、意味ごとの出現頻度がまだ得られず、多義すべてのつまり語の出現頻度をそのまま掲げています。代わりにということではありませんが、分類項目ごとに『分類語彙表 増補改訂版』の現代語を添えてみました。分類項目のイメージが少しでもはっきりするよという、配慮のつもりで、分類項目ごとの表現史のようなものが伺えないかとも想像します。エクセルの表としては表現せず、紙に印刷したような姿になり、分量が大きくなっています。

最後に、『日本古典対照分類語彙表』は、新たな作品を加えることが難しくなりました。新たな作品の語について、すでに語彙表にあるにしても、新たに加えるにしても、意味を考えなければなりません。一一の用例についてであったり、関連する語についてであったり、既存の記述についてであったり、考えがすんなりと進められるとは想像できません。白状してしまえば、現状の意味分類は、最終的には、あるいは最初から、宮島さんが決定しました。『日本古典対照分類語彙表』は、意味分類の記載という特徴については、宮島さんの著作にほかなりません。増補するという事は、増補する人が、宮島さんと対決しつつ、追加というよりは改新した語彙表を産み出してゆくことであると考えます。

妙な結びとなってしまいました。恐縮です。